

白川静のことば

《22》



金子都美絵・画

光は火を戴く人の形であるが、火の光の意であるよりも、語としては日の光と関係が深いようである。〔中略〕
 火を戴く人の形が、むしろ日光と関係のある語と深く連なるところがあるのは、あるいは当時の発火法のしかたと関係のあることかも知れない。古代の発火法としては、一般に錐火をとる摩擦法、燧うちを使う打撃法、レンズを用いて陽光をとる光学的な方法などがある。「礼記、内則」に、男子は正装のとき、左に金燧・右に木燧をとることがしるされているが、金燧とは凹面鏡のことである。

〔中略〕

火と日とを、ともに光と熱とを発するものとして類比的にみるというのでなく、日によって聖火を取ることから、日と火とが接点をもつ。それが聖火である。光はおそらく、厳粛な儀礼的な手続きで採取された火の保持者、すなわち聖火の管掌者を意味する字であったのであろう。それで光という字の造字法は、天の声を聞きうるような聖者を示す聖、遠く雲氣を望んで、その祥氣の善悪を定める望が、耳や目を上にした立人形で示されるのと同じく、上に火を戴く人の形でしるされているのである。

『文字遊』 平凡社 (p208~210)

